

翼 ばあーる 山の学校

第11回公式訪問報告



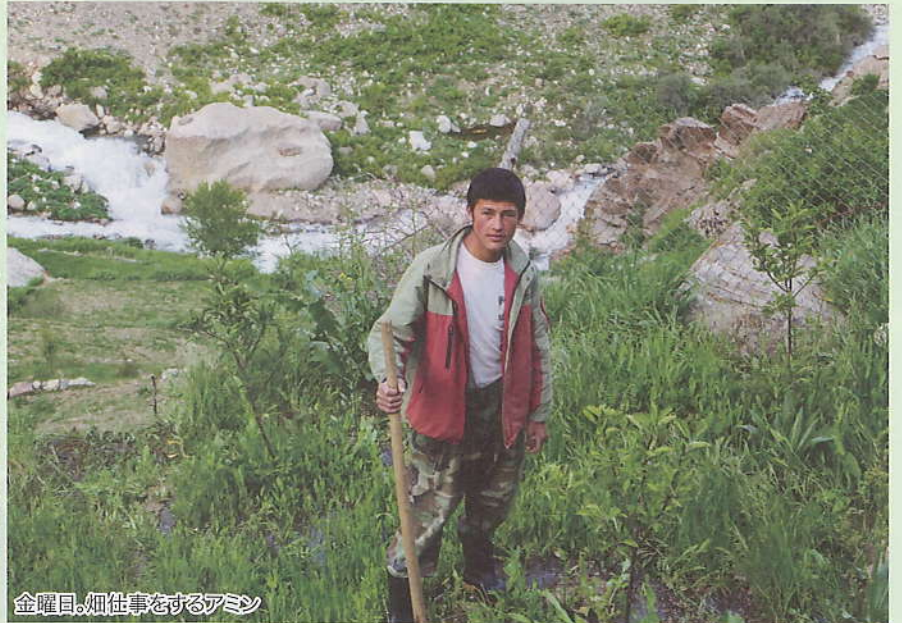
山の放牧から帰ってきた羊を家まで連れ帰る



休み時間。新校舎から旧校舎へ橋を走る。制服の青いシャツを着る子が増えてきた



登校途中で摘んできた野バラを机の上に置いて勉強する5年生



金曜日。畑仕事をするアミン



羊が山の放牧から帰るのを待つ間、バラワニ(アフガン・レスリング)を始めた子たち

会員のみなさま、お元気で
お過ごしでしょうか。6月、
山の学校への公式訪問を無
事に終えることができました。
6月はアフガニスタン大
統領選挙の最中でしたが、票
が不正に操作されるなどの
混乱ぶりを見ると、アフガニ
スタンはいまだに激動の時
代の中にあるのだなと実感
します。それでも、なんとか
全政治勢力が結集した政府
が誕生したのですから、アフ
ガニスタンを平和に導いて
ほしいと心より願っています。
まだまだ時間がかかるで
あろうアフガニスタンの再
建に、いつか山の学校の卒業
生たちが加わり、未来を担っ
ていく日が来ることを私は
信じています。

その日が来るまで、地域の
人々が「平和と豊かさ」を実
感できる日まで、皆さまと
もにアフガニスタンをこれ
からも見守り続けていきま
いと思えます。

長谷川洋海

アフガニスタン公式訪問

今年の訪問団の滞在は、5月31日から6月11日まで。長倉代表のレポートです。

5月31日、日本を出発。税関が面倒なインドを避け、イスタンブール経由だ。同行したのは運営委員の森、高橋、野崎の3名。6月1日、カブール着。安井さんと運転手のアクバルが出迎えてくれる。

ちようど、大統領選挙戦の真つ只中。アブドラ候補は第1回投票で45%をとったため、勝ち馬に乗ろうと各勢力が雪崩を打って加わり優勢だ。



選挙キャンペーン中のアブドラ候補

ノート、リュック、交流会用のお菓子は安井さんが事前購入しておいてくれたので、成績優秀者へのご褒美の本と交流会の果物などを買って求め、3日にパンシールに向かう。バザラックからポーランドに向かう道は、大工事中。道幅を7メートルにする拡幅工事とのこと。いままでも、崖崩れや落石で通行不能になることが多かったから住民は喜んでるに違いない。しかし、シヨベルカーやブルドーザー、トラックなどが道路を占拠していてなかなか前に進めない。お昼前に到着できなかったので子どもたちにも会えなかったが、荷を学校におろすと、バザラックに戻り、ヤシン先生の家に到着。

そこで、故サフダル校長の家が建設中と聞き、驚いてさっそく現場を見に行く。建設工事を手伝っていたバーゼットが「厚意で貸してくれていた家の家主が、古くなった家を建て替えることを決め、退去を迫られ、母親が持つていた狭い土地に家を建てること決意した」というのだ。しかし、その資金はど

うするつもりなのか。「最初は所持金で建て始めた。足りない分は地域の有力者に支援をお願いしているが、まだ出してもらえていない」という。「資金の当てがないのに無謀だ。会からの支援を当てにしているかもしれないが、それは難しいよ」



新校舎とトラック

と答えたものの、「年内に建てなければ行き場がない」と聞いて、どうしようかと頭を抱えた。

翌日、学校に行くと、うれしいニュースが待っていた。今年、バザラックの高校を卒業した「山の学校」出身者11名全員(男子8名、女子3名)が国立大学に合格したというのだ。カブール大学、カブール工業大学はじめ、バグラン大学、地元のパンシール大学に合格。バグラン工学部に入ったワーシクはトルコへの留学も決まったという。しかし、大学の授業料は無料といつても、カブールで学ぶとなればお金もかかる。親戚の家から通ったとしても、本代、交通費や食費などで月1000ドルはかかるという。だから、財政的に余裕がない



家を建てる手伝いをするバーゼット

に余裕がないため、中学卒業後、ルハのマドラサ(5年生のイスラム学校。寄宿舎があり、お金をかけずに幅広く勉強できる)を受けた生徒がいて、今年5人が合格した。どちらも競争率は激しいから、たいしたものだ。

校長のシャールミルザーとヤシン先生から「これも皆さんの支援の賜物。先生の講習を支援してもらったことで、先生の意欲が向上、それが質の高い授業となった」と感謝の言葉をもらった。

そのあと、三学年が勉強する新校舎を訪ねる。山側の斜面から落石があつて窓ガラスが割れていたり屋根の一部が壊れたためにいくつかの部屋で雨漏りがあつていて心配になつたが、子どもたちは元気に勉強

していた。空いている部屋を図書室にしたいと校長。いままで職員室に本があつて借りにくい雰囲気もあつたから大賛成だ。コンテナに本棚に使えるような木材があるというので、大工さんの日当を支援することにした。



一年生



交流会

教室にはまだ小さな1年生が大きな机にしがみつくように授業を受けている。いまにも落ちそうな葉の上の雫のようだ。いよいよ交流会。配られたケーキやジュース、マンゴーなどをみんな食べ出す。食べずにいる子がいる。理由を

聞くと、「家にもって帰って家族に見せる」「兄弟に食べさせたい」と答える。

ポーランドに着いて金曜日(6日)は日本の日曜日にあたる休日だ。集落をまわってみると子どもたちは農作業の手伝いに忙しい。日差しが暖かさを増し、高山植物が美しく咲き出す6月。山菜や茸もとれて

食卓をにぎわす。この時期がポーランドで一番すこしやすく、美しい時期なのかもしれないと生き生きと屋外で働く子どもたちを見て思う。

5歳から撮り続けているアミンも畑仕事に精を出している。17歳になり、男前が増したアミンに「もう結婚できる年頃だなあ」と水を向けると、「兄貴たちが先だよ」と頬を赤くする。好きな子がいるのだからか。アミンの妹マジヤミンも成長した。いつもの笑顔が見られないので、どうしてかなあと思っていたら、弟のサミールと喧嘩して、前歯が欠けてしま



草原で一休み

い、それを見せまいとしているのだった。父親の反対で中学を中断したままのナイマは私たちを昼食に招待してくれて心づくしのご馳走を振る舞ってくれた。やはり父親の反対で学校に通えなくなったローヤとアクラも懐かしそうに姿を見せた。学校に行けずに悔しい思いをした彼女たちはきつと自分たちの娘にはそんな思いをさせないだろうと思った。

帰国が近づいたので、サフダルの次男バーゼットと長女のファトナと話をする。「会員はみな、つまましい生活の中から支援をしてきている。一部屋でもできるように呼びかけてみるが甘えてはいけない。あなたの一家だけでなく、だれもが苦労して生きている。自

分が稼げるようになってから家を増築すべきだ」と話す二人は納得してくれた。

村人たちの話だと山向こうのアンダロフの方も道路ができていて、いずれ道がつながったら、この地域も大きく変わるだろう。道がよくなれば、子どもたちも下の学校に通いやすくなるかもしれない。でも、地域のセンターとしてこの学校の存在は大きい。「先生になって村の子を教えたい」「医者になって村人を治療したい」と夢を持つ子どもたち。その子たちが帰ってくる場所として、山の学校がいつまでも在り続けてほしいと願いながらポーランドをあとにした。



バラを手に登校

ムルサルさんのカプール通信

新たな船出 安井浩美



およそ、半年にわたった大統領選挙もやっと落ち着き、ゆっくりと「挙国一致政権」が動き出しました。いまだ閣僚人事は決まっていないものの、行政長官という新しいポストを政府が採用し、アブドラが着任しました。ガニ新大統領とともに権力を分割し、日々、激務に取り組んでいるようです。

アブドラ・ガニ両新政権代表が「我が国の財政予算は、ほぼゼロ」と公言するほど財政危機に陥っているアフガニスタン。英国がいち早く支援を表明、さらには大統領の中国訪問と積極的な支援確保に動いています。ここきて、カルザイ前大統領の13年間の評価が国民から問われ始め、最近では選挙管理委員会の不正関与とともに選管のカルザイ前大統領名での国費乱用までもがとりざたされているアフガニスタンの今日この頃。

新政権誕生後すぐに、米国とNATO(北大西洋条約機構)との間で、外国軍の駐留を可能にする地位協定が署名決定され、米国のアフガニスタン離れが見え隠れする中「これで何とかなる。仕事が見つかる。やったー」という安易な安堵の声が国民の間から聞こえることから、この国の持つ「困った時の人頼み」の性格が顕著に見てとれます。アフガン人は、よく「日本とアフガニスタンは、

同じ年に自由を勝ち取ったのに(そんな事実はないが)日本は世界の最先にいて、アフガニスタンはまだ困難な状況だ」と嘆きますが、敗戦後の日本人が忍耐強く、働きものだったことは、アフガン人とは対極的なところでは。

相変わらず、各地で国軍や警察を狙った自爆テロや爆破攻撃が起り、罪のない人々が犠牲になっているのは悲しいことですが、タリバン・アルカイダやその他のテロ組織の幹部が相次いで殺害もしくは拘束されていることは、警察や軍のアフガンの治安回復を望む強い気持ちの表れでもあります。

「挙国一致政権」という船は、こぎ出したばかりで前途多難ですが、国民をないがしろにしたカルザイ前政権を超える政権になることを願ってやみません。日本の皆様にも、引き続きアフガニスタンの将来を見守っていただければと思います。



コーランに手を置いて、大統領の宣誓文の朗読に続き、宣誓をする行政長官ら



用水路脇に咲いた野の花



山でサマロッド(キノコ)をザック一杯にとってきた



花見用のテラスでパレーをする女の子たち



最近、ポーランドに移ってきた兄弟が怒から顔をだした



ホラム先生の質問に答える1年生

アフガニスタン山の学校支援の会は、写真家・長倉洋海が取材活動を通して出会った、パシール渓谷ポーランド村の子どものための教育支援を目的として設立された非営利の団体です。2004年2月に設立、以後2014年3月までの約10年間にわたって活動を続けていきます。*2017年3月まで延長することになりました。

事務局から

●10月5日(日)JICA市ヶ谷ビル・国際会議場にて第11回現地報告会を開催いたしました。台風が接近している中で54名の参加者があり、長倉代表のスライド・トークに熱心に耳をかたむけるなかなか雰囲気のない、無事終了しました。今回は例年のようなパネル展示や交流会はありませんでしたが、『アフガニスタン ぼくと山の学校』のポスターやパネルが展示され、長倉代表の著書の販売やオリジナルプリントセールなどでにぎわいました。

●不要切手や書き損じはがきのご提供、ありがとうございました。今回の発送にさっそく使わせていただきました。今後ともご協力をよろしく願っています。

●『アフガニスタン ぼくと山の学校』のご注文をたくさんの方からいただきありがとうございます。引き続きご注文を受け付けていますのでよろしくお願いたします。なお、出版を記念してかまがわ出版で提供のポストカードを1枚同封いたします。

●住所変更の場合はお手数ですが電話、ファックス、はがき、メール等で事務局までご連絡をお願いいたします。

●JVC国際協力カレンダー2015「この星の旅人たち」(撮影 竹沢うるま)のチラシを同封いたします。

前回の会報送付時からサファル家の建設費の支援を個人的にお願いしてききましたが、170名以上の方々からお気持ちをいただきました。100万円を超える支援金が集まりました。本当に、本当にありがとうございます。心より感謝いたします。

長倉洋海